

# 市史しぼれ話

109

## 飯高地区

記録に残る飯高は、一二三六年（鎌倉時代・嘉禎二年）に香取神宮（佐原市香取）の造営を飯高氏が負担したものが最古とされます。それ以前、飯高周辺は匝瑳北条荘（ほうじょう）のしよ（よ）とよばれていました。

飯高氏は、千葉氏の流れをくみ、進出当初からその土地の地名を氏姓として名乗り、飯高神社を守護神としてまつたのでしよ。

日蓮の有力な信者である金原法橋（かなばらほうきよう）は一二七一年（鎌倉時代・文永八年）の文書にその名が見られ、

金原の出身とされています。この金原郷（こう）では、一三四〇年代（南北朝時代）以降、安久山村円静寺（あくやまえんじようじ）を拠点に日蓮宗の進出が知られています。解明のきつかけになったのが、円静寺境内の板碑（いたひ）群です。この碑が発掘されたという墓地は、小高い畑の中にあり、そこに興味ひかれる石塔があります。

### 市内でも珍しい領主の供養塔

地域の人から報告があったので紹介します。二基の石塔の側面には、院殿大居士（いんでんだいこじ）、院殿大姉（いんでんだいし）など二十四

名の戒名（かいまよう）が刻まれています。これが江戸時代の農民のものとしては不相应で、いったい誰のものか、調べました。

石塔は、木下家の墓域にあり、日殿（にちおん）という僧の名が見られ、飯高・妙福寺第十九世と同一人でしょう。戒名の人たちは一七三九年（元文四年）から安久山村の領主をつとめた旗本西尾氏に關係することがわかりました。幕末近くになり、当時、名主であった源兵衛の墓地に日殿が領主の供養塔を建てたと考えられます。日殿が亡くなった後も彫られています。こうした例は市内では初めてです。

安久山、大堀、小高（おだか）、片子（かたこ）、金原と飯高の六か村は、一八八九年明治二十二年）の合併で飯高村となりましたが、隣村の内山村（豊和地区）を含む七か村案もありました。

飯高寺の一六三九年（寛永十六）に造られた梵鐘（ぼんじょう）に、「匝瑳郡」と刻まれている。これは、九三〇年代に同地域が匝瑳郡十八郷に含まれていたことによるもので、飯高周辺が香取郡になったのが一七〇〇年以降のことです。今度は、匝瑳市に含まれることになりました。

（生涯学習課）

